

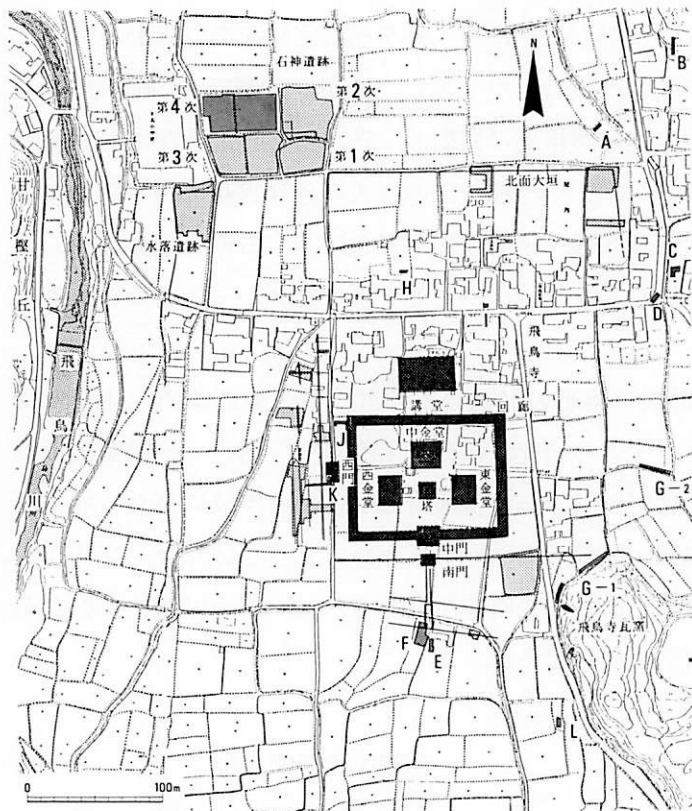
飛鳥地域の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1984年度、飛鳥藤原宮跡発掘調査部では飛鳥地域において、石神遺跡、水落遺跡、飛鳥寺跡およびその周辺地域、川原寺跡、橘寺跡、豊浦寺(宮)跡、山田寺跡など16件の発掘調査を実施した(20頁参照)。ここではそのうち主要な発掘調査についてその概略を述べる。

1. 石神遺跡第4次調査

飛鳥寺の西北隅に接し、水落遺跡に南で接する石神遺跡は、1902年に噴水装置とみられる須弥山石・石人像が出土したことでよく知られている。当調査部では1981年から継続して調査を行ってきた。その結果、須弥山石の転落位置が確認されるとともに、石組溝、石敷を伴う掘立柱建物、南の水時計地区と北の饗宴地区を区画する基壇付きの東西塀などの貴重な遺構の発見が相次いだ。今回は過去の調査成果をふまえて、各時期の遺構の範囲確認とその実態究明を目的に実施した。調査地は東で第2次調査区に接し、南で第3次調査区に接する水田で、東西約50~53m、南北28~30mである。検出遺構は7世紀前半から中世におよぶが、ここでは7世紀中頃から8世紀初頭にかけての遺構を取りあげる。この時期の遺構は建物・塀の方位、重複関



飛鳥地域調査位置図

係、整地土、出土遺物からⅠ～Ⅳの4期に大別でき、Ⅰ期をさらに2期に細分できる。

Ⅰ-Ⅰ期 井戸1、掘立柱建物2、石組溝4、方形区画、石敷がある。建物の方位は方眼北に対して東に約2°振れる。建物の柱抜取状態はまず柱周囲を不整形に掘り下げ、その後はほぼ直上に柱を抜き取り、山土で埋め戻すという特徴がある。これらの点はⅠ・Ⅱ期に共通する。

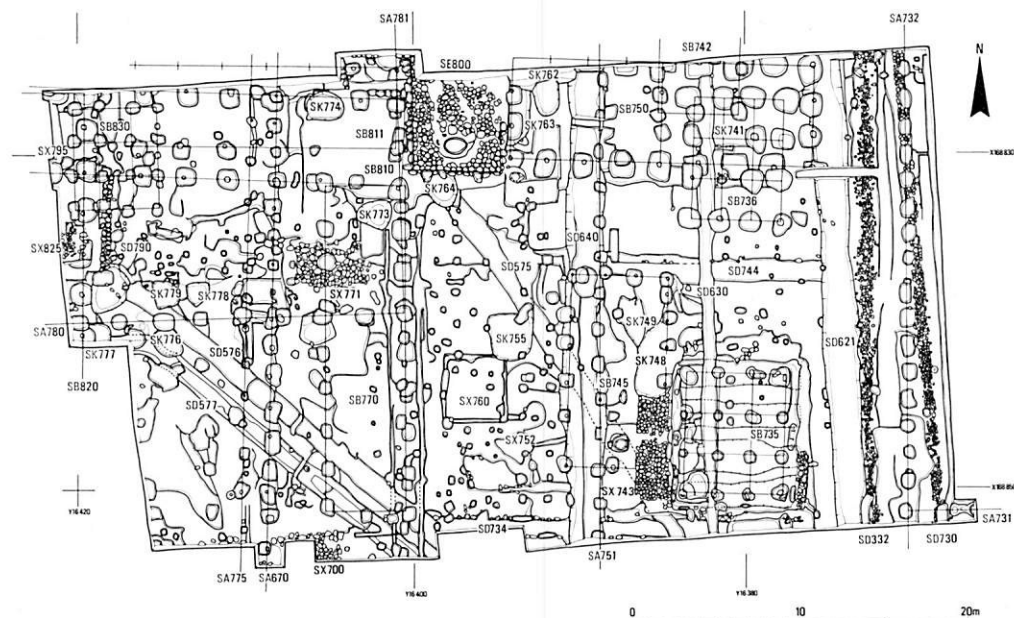
井戸SE 800 はくり抜いた最大厚18cmの杉板材を2枚組み合わせる井戸枠とし、その周囲に人頭大の玉石を方形に敷き、石敷縁として側石を立てたものである。井戸の

北には一段低い排水溝を設ける。石敷は、東西が5.3 mある。南北規模を側石からみると当初、南隅から4.8 mで側石が西に折れるが、次期には6.7 mの位置で西に折れ、石敷を拡張している。井戸の深さは3.8 mあり、約3 mほど井戸枠が残る。井戸枠の平面形は紡錘形で、東西の内法は上面で1.37 m、底面で1.2 m、南北の内法は各々0.81 mと0.67 mである。井戸枠の北と南には、底面の近くに40～45 cmの孔があく。掘形側に石を詰めており、おそらく取水口の役割を果たしていたのであろう。なお、井戸からは多数の土器・木器が出土した。

井戸の東と西には石敷の側石掘形と重複して東西にSB 750・810が建つ。遺構の切り合い関係が、柱掘形→側石の掘形→柱抜取穴の順なので、井戸と建物は同時に存在していたことは確かである。SB 750は桁行8間(柱間2.27 m等間)、梁行3間(柱間2.0 m等間)の東西棟建物で、桁行の中央に間仕切りがある。SB 810は桁行8間以上(柱間2.08 m等間)、梁行2間(柱間2.6 m等間)の東西棟建物である。

石組溝にはSB 750の東に北流するSD 730・332、南に西流するSD 744、西にSB 810と重複して北流するSD 790がある。側石はSD 322に1石残るのみで、他は抜き取られ、SD 744以外の溝には底石を敷く。なおSB 810とSD 790は重複部分の施工順序からみて、共存していたと思われる。

井戸の南方に方形区画SX 760がある。幅20～30 cm、深さ25 cmの溝状の窪みが一辺約4 mで方形に巡る。溝状窪みの中央部は粘土化し、北西隅で先端を東にした長さ約30 cmの釘が出土した。釘には縦方向と横方向の木目が残っているので、方形の溝状窪みには四隅を釘止めにした木材が埋没されていた可能性が強い。



I—2期 井戸1, 掘立柱建物2がある。井戸は石敷が北へ拡張された時期である。SB 745は桁行5間(柱間1.65~2.95m), 梁行は北妻3間(柱間1.93m等間), 南妻2間(柱間2.9m等間)の南北棟建物である。SE 800の西にあるSB 811は, 桁行6間以上(柱間2.6m等間), 梁行2間(柱間2.5m等間)の東西棟建物である。井戸周辺の石敷の拡張に伴って, SB 810とはほぼ同規模の建物を北へ約2mずらして建替えたものと想定される。

II期 掘立柱建物3, 掘立柱塀2, 石組溝1がある。SB 735は桁行3間(柱間2.4m等間), 梁行3間(柱間2.0m等間)の南北棟総柱建物, SB 736は桁行3間(柱間2.4m等間), 梁行3間(柱間1.8m等間)でやはり南北棟総柱建物である。両建物は西側柱筋を揃え, 妻柱間の心々距離で約9m離して, 南北に配列する。SB 735の柱掘形は東西約7.5m, 南北1.2~2m, 検出面からの深さ1.5mの布掘り工法で施工されている。さらにこの建物の四周に, 柱心から北, 南, 東の三方が約1.6m, 西は約2.8mにわたって石敷が巡る。石敷と建物の柱との間には溝が巡っており, この溝を建物と石敷との間に設けた縁石の抜取跡とみると, 建物の床下は外周石敷より一段高くなっていたと推定できる。西面石敷の西側にはバラス敷SX 743があって, 遺存する範囲は狭いが, 当初はSB 735の周囲に幅広く敷かれていたと思われる。石組溝SD 734がこの建物の南面石敷の西延長線にはほぼ一致して, 西流する。側石に一石をたて並べたもので, 底石はない。調査区の西端にあるSB 820は, 桁行6間以上, 桁行2間以上で, いずれも柱間2.4m等間の南北棟とみられる建物である。

掘立柱南北塀SA 670・775は調査区西半部にあり, 北と南は調査区外に延びる。SA 670は16間分(柱間1.69m等間), SA 775は11間分(柱間1.8~2.25m)を検出した。

III期 掘立柱建物2, 掘立柱塀3, 小鍛冶炉跡がある。遺構の方位は方眼北とほぼ等しく, 柱抜取法はI・II期とは異なり, 柱掘形を壊す工法である。SB 770は桁行8間(柱間2.1~3m), 梁行2間(柱間2.4m等間)の南北棟建物である。抜取穴からは藤原宮期の土器が出土した。SB 742は桁行2間以上(柱間2.4m), 梁行2間(柱間2.4m)の南北棟とみられる建物である。SA 732は調査区東端にある南北塀で, 北は調査区外に延びる。この南北塀は, 調査区南端で東西塀SA 731と接続する。調査区内でSA 732は16間分(柱間1.65m)を, SA 731は2間分(柱間2.1m)を検出した。一方, SA 751は調査区東半にある南北塀で, 調査区内で11間分(柱間2.1m等間)を検出した。SX 795は調査区西端の北寄りにある。一辺0.6mの範囲に黄褐色粘土を敷き, その中央部が熱のために赤変して焼きしまっている。

IV期 掘立柱建物1, 掘立柱塀2, 素掘り溝2, ほかに土壌が数多くある。遺構は方眼方位北に対して, 西に約1.5°振れる。SB 830は桁行3間(柱間2.0m等間), 梁行3間(中央柱間2.9m, 脇柱間1.5m)の南北棟総柱建物である。この南面と東面にL字状に折れ曲がる塀SA 780とSA 781とがあって, この建物を取りかこむ。調査区内で, SA 780を8間分(柱間2.4m等間), SA 781を6間分(柱間2.7m等間)を検出した。調査区の東半には2条の南北溝SD 640とSD 641がある。いずれも素掘りで, 北流する。このほかに7世紀後半から8世紀初頭の土器が出

土した SK 748・749・755・762～764・773・774・776～779 などの土壌が多数ある。

遺物 瓦，土器，土製品，金属製品，木製品，石製品のほか，玉類，動・植物遺存体など出土遺物は多種多彩である。ここでは特徴的なものだけ取りあげる。

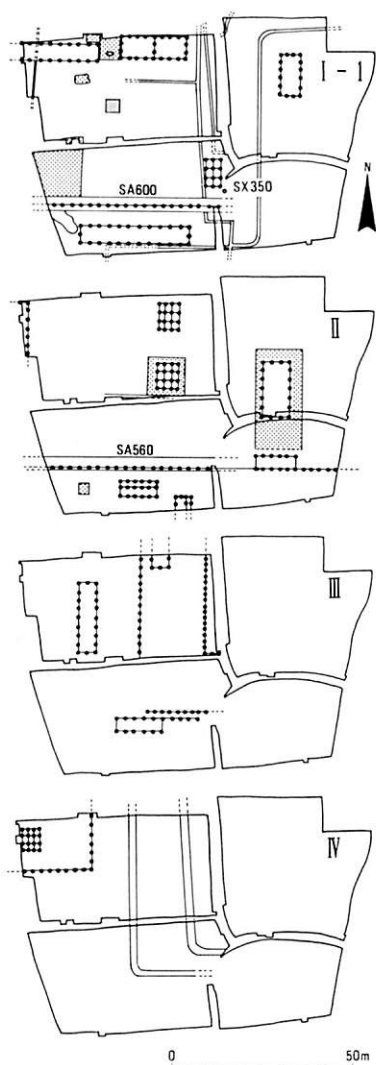
瓦類は主に SB 735 を覆う黄褐色粘土層から出土した。軒瓦は軒丸瓦26点で，その大半は単弁 8 弁の角端点珠をもつ軒丸瓦と飛鳥寺創建時のそれに類似した単弁10弁軒丸瓦である。

土器には，縄文土器，弥生土器，古墳時代の土師器・須恵器をはじめ，中世の瓦器などがあるが，なかでも 7 世紀中頃から 8 世紀初頭の時期(飛鳥Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ)の土師器，須恵器が圧倒的に多い。特に SE 800 の埋土からは飛鳥Ⅲ期と考えられる約 200 個体におよぶ土器が出土した。ほかに頸・胴部に楕円形の列点文・鋸歯状文・点半円文をめぐらした新羅土器壺，内面のみを燻した東北地方の黒色土器杯がある。土製品には 9 脚に復原できる獣脚硯のほかに，円面硯，土馬，フィゴの羽口がある。

金属製品には大量の鉄製品のほか，銅製品もある。鉄製品は主に藤原宮期の整地土・土壌から出土した。鋳，斧，鎌，刀子，ヤリガンナ，カスガイ，釘などの多くの種類がある。なかでも鋳は 150 点以上あり，特に注目される。

まとめ 今回検出した 7 世紀中頃から 8 世紀初頭にかけての遺構を，過去の調査成果とともにまとめておく。

I-1 期と井戸 SE 800 の石敷側石を改作した I-2 期との時期は，井戸出土土器から，7 世紀半ばをやや降る時期と考えられる。第 3 次調査で饗宴地区と推定した塀 SA 600 の北側には石敷を伴う井戸を中心に大規模な建物を配する。このありかたは，今後饗宴地区の構造を知る上で重要な手懸りになるものと思われる。Ⅱ期の時期には，塀 SA 600 の位置は，塀 SA 560 として踏襲されるが，井戸，石組溝は埋められ，建物配置も異なっている。その時期は 7 世紀後半でも天武朝の時期に求められよう。さらにⅠ期とⅡ期の間には，単なる改作にとどまらない大きな画期がある。饗宴場として利用され続けたものであるか否か，この一帯が早くから飛鳥浄御原宮跡と推定されてきたこととの関連を含めて，なお慎重な検討を必要とする。Ⅲ期は天武朝の後半期と推定されるが，先の 2 期とは根本的に異なる単位のもとに当地域が利用



石神遺跡主要遺構変遷図

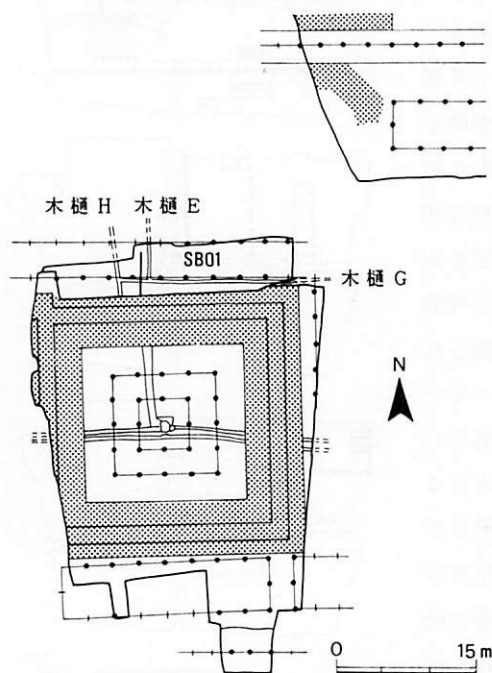
されていたと考えられる。Ⅳ期は藤原宮期にあたり、Ⅲ期の南北塀の位置を踏襲して素掘り溝が掘られ、そこから離れた西北部は塀で区画される。この塀で囲まれた建物は、この地区の中心建物と言いがたい。従来この時期の遺物は大量に出土していたにもかかわらず、遺構は稀薄であった。今回、建物・塀を検出したことにより、藤原宮期における利用形態の一端も明らかになったといえよう。

2. 水落遺跡第5次調査

史跡整備のための資料を得る目的で行った調査である。調査地は時計台の建物のすぐ北側で、昨年まで旧飛鳥小学校の校舎が建っていた跡地である。発掘した範囲は、東西 25 m、南北約 6 m、面積 150 m² ほどである。

検出した遺構はⅠ期・Ⅱ期の二時期に大別でき、Ⅱ期はさらにⅡ-1期、Ⅱ-2期に細分できる。Ⅰ期は時計台の建物と同時期で7世紀中頃を少し下った時期にあたり、Ⅱ-1・Ⅱ-2期は、7世紀後半でも中頃以降に相当する。この時期区分は石神遺跡のⅠ・Ⅱ両期に相応する。

Ⅰ期の遺構には、掘立柱建物1、木樋3、銅管がある。掘立柱建物 SB01 は時計台の建物の外周貼り石溝のすぐ北にあり、東西9間(24.3 m)以上、南北1間か2間(4.2 m)の東西棟である。桁行の柱間寸法は、2.74 m 等間。時計台の建物や、その南に建つ掘立柱の付属建物と柱筋が通っており、これらの建物が一連の計画で造営されたことは確実である。柱掘形は方 1.6 m、深さ 1.5 m ととくに大きい。柱は径 38 cm の円柱で、すべて抜き取られており、時計台の建物と同時に解体されたことが知られる。この建物の地下には、水を流すための銅管や木樋が縦横



水落遺跡第5次調査遺構図

に張りめぐらされている。銅管は内径が0.9 cm の細いもので、長さ 6.5 m を検出した。1981年に時計台の建物の中央で発掘したものの北延長部にあたり、今回までで総長 18.2 m 分を検出したことになる。銅管は建物 SB01 の地下で二又に分かれており、一本はそのまま北へのび、枝分かれしたもう一本は建物の北端で地上に立ち上がる。後者は長さ 30 cm を残すのみで、先端は失われている。銅管を地中に埋め込むにあたっては、まず、木くずを漆で塗り固めたものでくるみ、さらに、これを幅 10 cm ほどの材木を木樋のようにつくりぬいた中におさめて、ていねいに埋めこむ。時計台の建物の中央から北へ次第に低くなり、分岐点までで 80 cm の落差がある。この銅管は、時計台の建物内から北方へ水を導くための通水管とみられ、水落遺跡の北

方には、特殊な水カラクリの存在が想定できる。

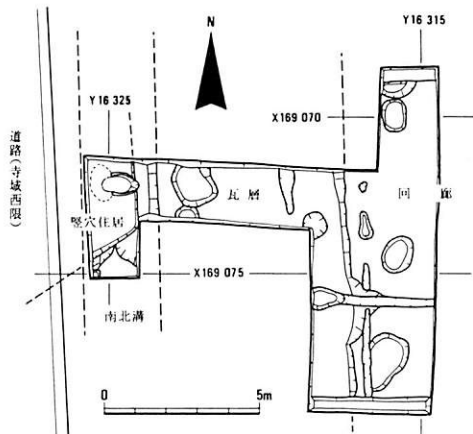
木樋は2条ある。木樋Eは外寸で、幅・深さともに約30cm。水時計で使う水を取水したあとの余剰水を北に流す暗渠で、建物SB 01の地下を南北に通って、北へ抜ける。木樋Gは本体は遺存していないが、その据え付け痕を検出した。建物SB 01の南縁に沿って東から西へとのび、木樋Eや銅管の上を立体交差して、さらに西へ連なる。木樋Eとはほぼ同規模で、全長18m分を確認した。木樋GはSB 01の西よりで、北へ折れる木樋Hに連結し、建物外の北へ続く。木樋Hは本体は遺存しないが、外寸幅50cmで木樋E・Gに比べて一まわり大きい。全長6m分を確認した。このように、水落遺跡の付近一帯には、水時計を中心に、銅管や木樋を使った地下水路が複雑に張りめぐらされているのであり、今後、全体像の解明が期待される。

なお、Ⅱ-1期には東西7間、南北2間の掘立柱建物が、Ⅱ-2期には東西4間以上、南北3間で、北廂付きの東西棟とみられる掘立柱建物がある。Ⅱ期の建物群は時計台の建物を撤去後に建てられており、7世紀後半に、この地域の土地利用に大改造のあったことが知られる。

3. 飛鳥寺周辺の遺跡

飛鳥寺西回廊(J地点)の調査 車庫改築に伴う事前調査である。1956・57年の調査成果によれば、調査地は回廊西北隅に近く、西回廊から寺域西限施設までの間と推定された。調査の結果、回廊基壇の基底部とみられる高まりを検出した。この高まりは版築状の薄い粘土層からなり、調査区の東端から西へ約3mの位置で急激に落ちている。この上面の西端に、南北方向の細長く浅い土壌がある。もしこの高まりを回廊基壇の一部と考えれば、この土壌を緑石抜取痕とみることができる。高まりに接して、西側には瓦層が厚さ約20cmで広がっている。瓦は敷かれた状態ではなかった。瓦層は伴出した土器などからみて、奈良時代の整地層だろう。調査区の西端で、南北溝の東半部を検出した。浅いU字状を呈した素掘り溝で、位置から飛鳥寺の西限を区画する施設に沿って南北に延びる溝とみられる。瓦層で覆われており、溝の埋土から多量の瓦片とともに、7世紀中頃～後半の土器片や円面硯が出土した。なおこの南北溝の下で、カマドを作りつけた竪穴住居を検出した。出土土器や層位から6世紀代と考えられる。

飛鳥寺西門(K地点)の調査 農小屋建築に伴う事前調査で、調査位置は安居院の西約70mである。1956年の調査(飛鳥寺第1次)で西門の遺構の一部を検出しており、この調査区の東端に西門南西部がおよぶと推定される。一方、1966年には今回の調査区の西と南とにある水田で、榎原考古学研究所が調査を行い(飛鳥京第11次)、石敷や石組溝などが検出されている。さらに北の水田では1969年の調査



飛鳥寺西回廊(J地点)調査遺構図

(飛鳥京第18次)で、石組溝の延長部が確認されており、今調査区にも一連の遺構がおよぶものと推定されている。そこでこれらの成果にもとづいて、西門、および周辺部の実態究明を目的に調査を実施した。

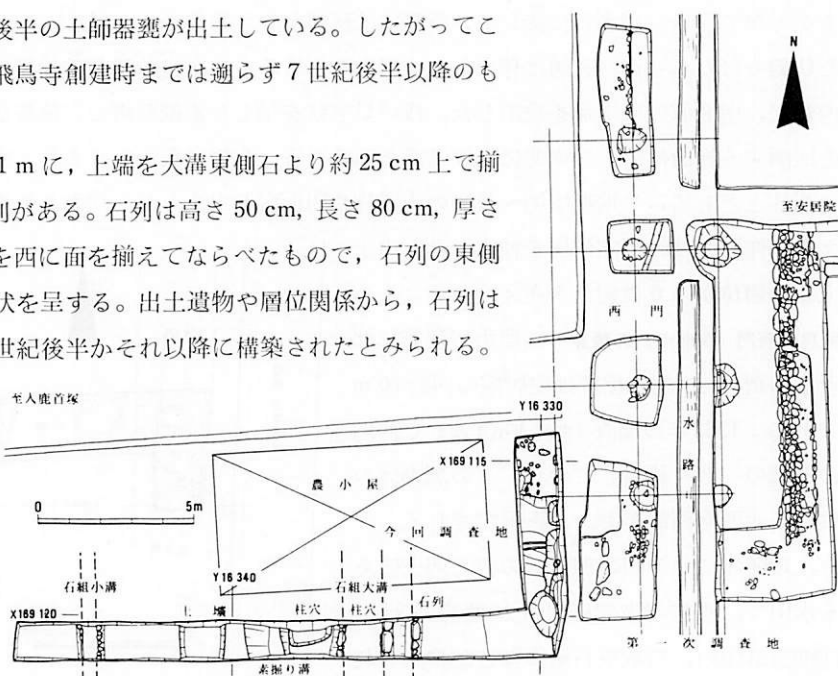
調査の結果、南北トレンチで二種の積土層を確認し、東西トレンチで西から順に石組小溝、石組大溝、石列等を検出した。西門については明確な遺構を検出できなかったが、その位置からみて、南北トレンチの積土層が西門の基壇土の一部と考えられる。積土層の上面には小石の抜取痕跡があった程度で、礎石や基壇縁石などの抜取痕跡は確認することはできなかった。飛鳥寺第1次調査で検出した礎石上面高の推定値より、今回の積土層の検出面高が、約40cm下であるのを考えると、基壇土自体が後世に大きく削平されているのだろう。

石組小溝(県調査SD 6684)は上幅42cm、深さ13cmの南北溝で、長さ1.2m分を検出した。南側での調査分をいれると南北総長26m以上となる。溝は礫・瓦片を含む整地層を切りこんで作られている。側石は20cm大の玉石一段からなるが、西側が総じて大振りである。しかも西側石が据え付け溝の底にあてているのに対して、東側石は10cm余浮いた状態にある。溝の東西にみられる整地層の違いを重視すれば、西側石は西にある基壇の縁石の可能性が考えられる。

石組大溝(県調査SD 6685)は上幅1.25mの南北溝で、長さ1.2m分を検出した。この溝はすでに検出されている石組溝と一連であるから、飛鳥寺寺域西限にそって、すくなくとも南北約120mにわたって設けられていることになる。側石は80cm大の花崗岩、河原石一段からなる。側石の上端の高さをみると、東側石の方が約10cm高い。側石の裏込めから、多量の瓦片・礫ともに7世紀後半の土師器甕が出土している。したがってこの石組大溝は、飛鳥寺創建時までは遡らず7世紀後半以降のものと思われる。

石組大溝の東1mに、上端を大溝東側石より約25cm上で揃えた、南北の石列がある。石列は高さ50cm、長さ80cm、厚さ20cmの花崗岩を西に面を揃えてならべたもので、石列の東側は一段高い基壇状を呈する。出土遺物や層位関係から、石列は大溝と同じく7世紀後半かそれ以降に構築されたとみられる。

なお石組大溝と素掘り溝の下の2ヶ所で柱穴を検出した。いずれも一辺1.2m以上の大型の掘形である。出土遺物からみて、



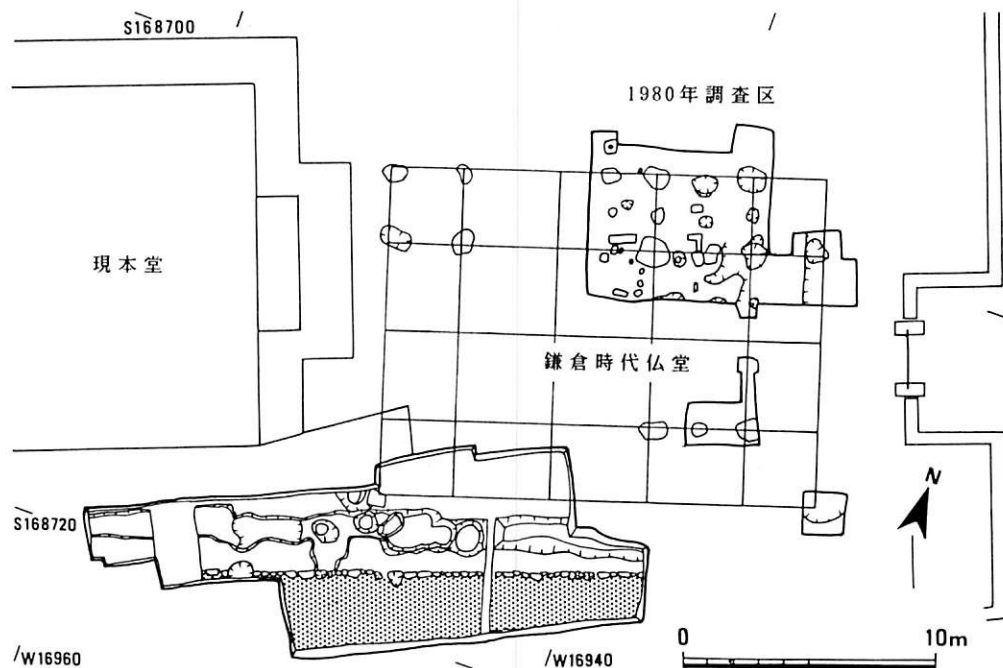
飛鳥寺西門(K地点)調査遺構図

時期が異なるとみられる。飛鳥寺の西方は『日本書紀』に記された槻木の広場の存在が想定されており、その一角とみられる石神遺跡では、7世紀に大改造された遺構群が重複していることが判明している。西門西方で検出された石組溝、石列等についても同様の状況下で造作・整備されたものと理解できる。

4. 豊浦寺・豊浦宮の調査

向原寺の庫裡改築に伴う事前調査である。周知のように周辺一帯は蘇我氏が造営した豊浦寺あるいは推古天皇の豊浦宮の故地に比定されており、すでに数回にわたる調査が実施されている。1957年には奈良県教育委員会によって、境内で中世の礎石建物、その南接地で7世紀後半の瓦をともなう二重基壇の建物、さらに南で塔と推定される遺構が検出されている。1980年には当調査部が薬師堂の改築に伴って、中世の礎石建物を再調査した結果、この建物は鎌倉時代初めに再建された床板張りの仏堂で、室町時代後半に焼失したことで、その下層に創建時の基壇とみられる版築層が存在することが判明した。今回は、創建期基壇の規模や年代、さらに下層遺構の存否の確認を目的とし、東西22.5m、南北7.7mの範囲で発掘調査を行った。検出した主な遺構には、創建時の豊浦寺にかかわる遺構と豊浦寺創建以前の下層遺構とがある。

豊浦寺の遺構 調査区の北半部で、創建期の版築基壇を検出した。基壇は掘り込み地業をせずに、古墳時代の遺物を含む黒褐色土や先行する整地土の上に直接版築して築く。版築層は黄褐色山土と青灰色山土とを主体に、平均5cmの厚さで積み重ね、最も遺存状態の良い所で、高さ1.1mを残す。版築土中には丸瓦や平瓦の小片がかなり含まれていた。基壇の上面は近世に



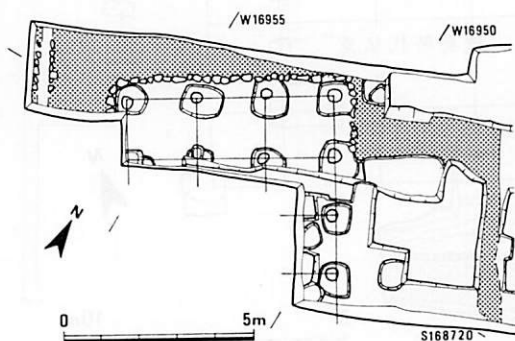
豊浦寺調査遺構図

著しく攪乱されており、鎌倉再建仏堂の礎石位置を示す遺構すらすべて破壊されていた。

調査区南半部ではひと抱えほどの大きさの花崗岩玉石や基壇化粧の凝灰岩切石を転用して東西に並べた石列を検出した。この石列は創建基壇の南縁を画する雨落溝の南側石と考えられる。全長約 18 m にわたって遺存し、発掘区外に延びる。基壇化粧石はすべて抜取られていた。雨落溝のすぐ南には 25 cm 前後の大きさの玉石が敷かれており、さらにその南側は人頭大から拳大の玉石を使った石敷へと続く。雨落溝と玉石敷は下層から出土した土器からみて、奈良時代以降に設けられたことは明らかである。創建時には基壇だけでその外側は整地土がそのまま境内面になっていたとみられる。

今回検出した基壇建物は、豊浦寺創建時に遡る主要な建物の一つである。基壇の規模は前回の調査成果を総合すると、東西 30 m 以上、南北 15 m となり、建物は大規模な東西棟礎石建物であったと考えられる。その規模や位置から、この建物は講堂の可能性が高い。建物の方位は方眼北に対して、西へ約 19° 振れている。また造営した時期は、基壇南側から多量に出土した単弁軒丸瓦や丸瓦・平瓦から 7 世紀の第 2 四半期とみられる。その後、奈良時代以降に雨落溝や玉石敷がつけ加えられ、10 世紀以降に倒壊ないし焼失したものと考えられる。鎌倉時代初頭になって、この基壇の東寄りの部分を利用して仏堂が再建されたが、この建物も室町時代後半には再び焼失したとみられる。なお、基壇築成に先行する土壌からは飛鳥寺と同範の単弁軒丸瓦が多数出土し、また版築土からも瓦が出土しているから、この大規模な基壇建物を先行して、別に瓦葺きの建物が周辺に存在した可能性が強い。

下層遺構 基壇とその南にひろがる整地層の下層から石敷をともなう掘立柱建物などを検出した。建物は桁行 3 間(柱間約 1.56 m 等間)以上、梁行 3 間(柱間約 1.83 m 等間)の南北棟総柱建物である。柱掘形は一辺 1 m、柱の復原径は約 30 cm あり、建物の方位は方眼北に対して 30° 西へ振れる。施工順序は、まず旧地表面に掘形を穿って柱を立て、その上に厚さ約 10 cm の整地土を盛り上げる。北妻柱筋から北へ約 1.5 m の位置には拳大の玉石を並べ、その北側に玉石を敷いて建物周囲を化粧する。その後西側の丘陵から土が流れ込んで玉石が埋没するに及んで、建物の内側や周辺を再度黄褐色山土で整地する。さらに柱筋から約 30 cm 離して建物の周囲に



豊浦寺下層建物遺構図

玉石列を設け、その外側には玉石やバラスを敷き詰め、また床下にあたる部分にもバラスを敷いている。建物の西側では柱筋から約 2 m 離して見切りの玉石を据え、その外側に幅約 25 cm の雨落溝とみられる施設を設けている。この建物の時期は出土した土器からみて、7 世紀初頭をそれほど下らないものと考えられる。

この下層建物は玉石敷を伴うことなど飛鳥

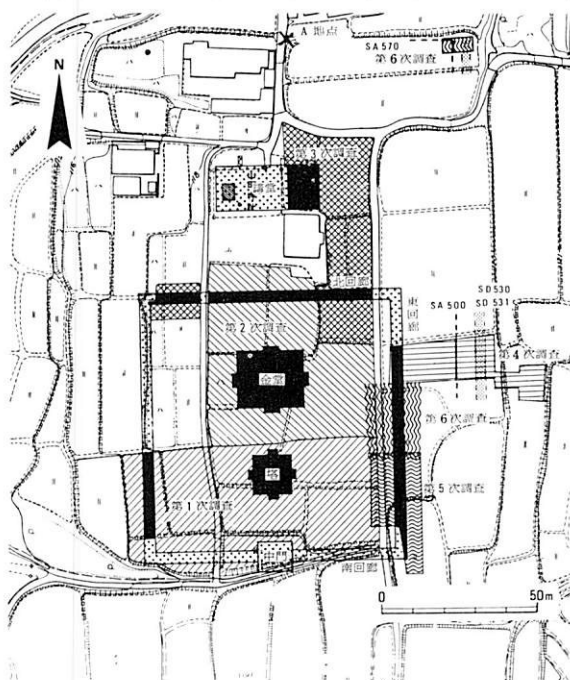
の他の宮殿遺構に共通する点が多い。しかも豊浦寺は豊浦宮（593～603年）の跡地に造営されたと伝えられており、今回検出した下層遺構が豊浦宮の一部にあたる蓋然性は強いといえよう。周辺地域での今後の調査の進展を期待したい。

5. 山田寺東回廊・寺域東北部（第6次）の調査

第4・5次調査によって回廊の規模が判明し、また回廊の建築部材が多量に出土したため建物の復原が可能になった。東回廊の東では、南北方向の基幹排水路と南北塀を検出し、これが寺域内を区画する施設である可能性が強まった。今回は回廊建物のより詳細な復原資料を得ることと、南北23間を数える東回廊の中央12間目での入口の存否を検討すること、さらに基幹排水路と南北塀の性格を明らかにすることを主たる目的として調査を実施した。東回廊の調査区は北から9間目から15間目までの南北29m、東西18mの範囲で、北は第4次調査区に、南では第5次調査区に一部重複する。寺域東北部では南北塀の東北隅の推定位置に、東西10m、南北5mの調査区を設定した。

回廊 回廊は土間床の単廊で、礎石はすべて原位置を保つ。柱間の桁行・梁行ともに3.78mの等間で、1尺=36cmの高麗尺で計算すれば10.5尺になる。回廊の東西基壇化粧は、おもに花崗岩の自然石を一段立て並べたものである。基壇幅は約6.4m、礎石心から基壇縁までの距離は1.3mである。東側柱列では北から12間目の入口推定位置を除けば、すべての柱間に幅60～80cm、深さが礎石上面から30～35cmほどの小溝があり、なかに瓦・埴・板石が詰め込こんであった。これらは地覆石を抜き取った後、その空隙に詰めたものと考えられる。その時期は第5次調査の所見によれば、9世紀前半～中頃である。基壇西側の化粧石は、回廊西雨落溝の東側石を兼ねており、溝の西側石より大型の石を用いている。基壇の東側には雨落溝は設けられていない。建築部材は調査区南半部で遺存度が良好である。特に13・14間目で連子窓が組まれた状態で出土するなど、部材の量・種類が豊富である。今回判明した要点を列記する。

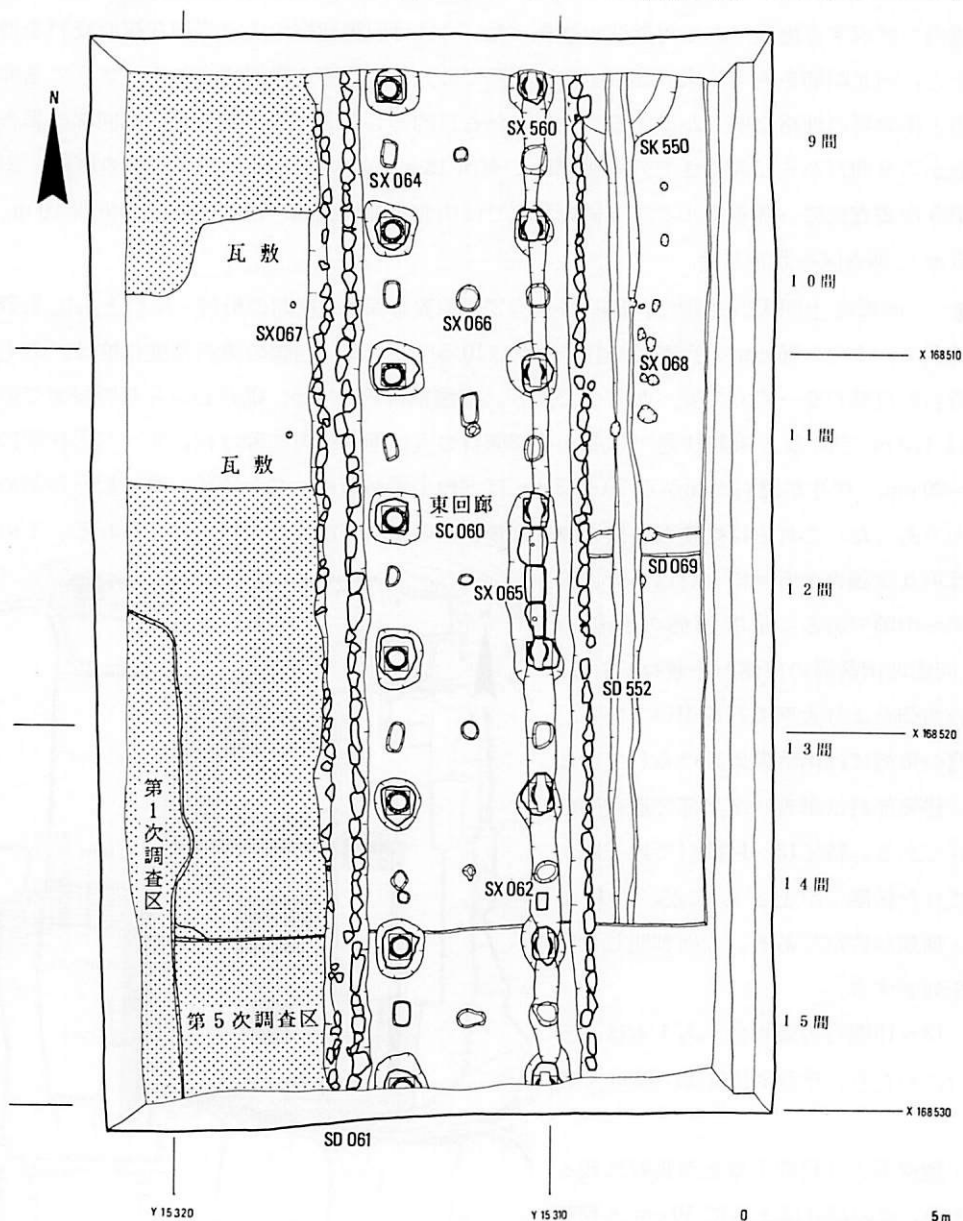
- (1) 13～15間目の頭貫のうち1本は、三間分にわたり、その全長は11.32mである。
- (2) 腰壁束と斗栱間小壁とが良好に残っており、その高さはともに50cmと判明した。



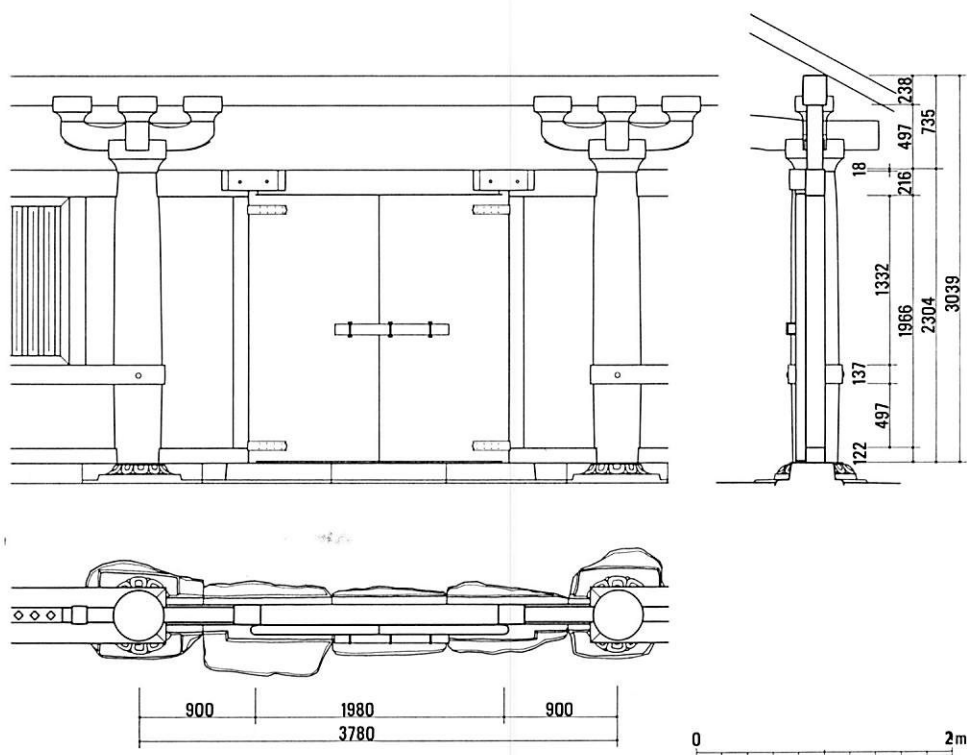
山田寺調査位置図

(3) 肘木は第5次調査で、舌を有することが判明している。今回出土した肘木のうちの一本はその上半部が良好に残っており、全長が1.2 m、巻斗の心々間が50 cmと判明した。上面の巻斗間には背繰りを施した上にさらに笹繰りを設けている。

(4) 茅負は3点が良好に残る。L字状の断面形を呈し、断面の寸法で大小2種がある。大型のものは15 cm 角の材で、残存長が5.7 mに及ぶ。瓦繰りの間隔は約31 cmで、柱間一間(3.78 m)につきほぼ12列並ぶ。垂木には釘で打ち付けており、釘穴間隔は長いところで2.51 mに及



東回廊遺構図



東回廊建物中央扉口復原図

ぶ。小型のものは 11 cm 角の材で、釘穴 2 本が約 60 cm 離れて残っている。垂木割りは瓦割りにほぼ一致していたものと判断される。

(5) 壁木舞は縦横一方を心として、その両面から直交方向の木舞で挟むが、腰壁・連子脇小壁は横木舞を、斗拱間小壁は縦木舞を心とする。

東扉口 回廊の 12 間目で東扉口を検出した。東側柱列の礎石間には、原位置を保つ 3 個の花崗岩製地覆石があり、この上に地覆材が残っていた。地覆座の幅は 3 つとも 32 cm 前後である。北と南の地覆石には礎石の地覆座と同じ幅 (25 cm) の切り欠きがある。地覆石の長さは北から順に、101 cm, 90 cm, 95 cm である。北と南の地覆石には軸摺穴 (径 8 cm, 深さ 5 cm) が穿たれ、北側の軸摺穴の中には内径で 6 cm ほどの軸摺金具が残存していた。

遺存した部材から、扉口は連子窓を構える他の柱間と同一の加工で、柱高も変わらず、一連の屋根が続く構造となることが判明した。さらに以下の諸点が知られる。

- (1) 扉は内開きで、軸摺穴は地覆石を直接穿つ。軸摺穴の心々間の距離 1.98 m は、柱間が高麗尺で 10.5 尺なのに対して、5.5 尺に当る。法隆寺の 6.5 尺余に較べて開口幅が狭い。
 - (2) 戸当たりとなる地覆は柱間いっぱい入れる。地覆の幅は他の柱間より狭く頭貫の幅に揃える。
 - (3) 扉口にも内法長押は用いず、軸摺穴を穿った別材 (藁座) を頭貫に打ち付けたと判断される。
- 扉口付近から出土した部材に、長さ 50 cm で両端木口を斜めに切り落とし、ノミ彫りの釘穴 2

ケ所を残したものと、軸摺穴の一部とみられる断片があり、礎座と考えられる。

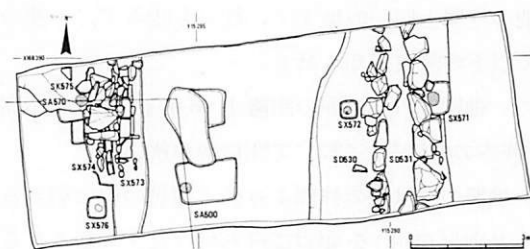
(4) 連子窓下の長押は、扉口両脇の柱で留に回す。

以上から復原できる扉構えは、頭貫・地覆間に方立を立て、地覆石と礎座に穿った軸摺穴に扉板を釣り込む形式となる。法隆寺回廊の扉口の現状に較べて、開口部が狭く、構成部材の少ない簡単な形式である。扉板の形状、門等の施錠施設は不明である。なお復原図は柱間寸法から割り出した1尺=36cmを採用し、最小単位を5分・2分として数値を整理したもので、整理途中の暫定的数値である。

寺域東北部 遺構は重複関係から3期に大別できる。

I期には南北塀 SA 500、東西塀 SA 570、柱穴 SX 571、南北素掘り溝 SD 530 がある。南北塀 SA 500 は2間分を検出しただけである。東北隅の柱は南東方向に抜き取られており、南側の柱掘形の一部を壊している。南の柱掘形には上部をノミで切断した径29cmのヒノキの柱根が残る。柱間寸法は約2.3mになる。東西塀 SA 570 の西側の柱掘形は新しい土壌で大半が壊されていたが、柱掘形の一部と柱痕跡とを確認した。掘形の大きさと柱痕跡の径とからみて、南北塀 SA 500 は西にL字状に折れ曲り、東西塀 SA 570 に連なるとみて間違いない。東西塀 SA 570 は、従来北限を画する塀の一部と考えられていた柱穴(A地点)に連なるのであろう。時期を特定できる手懸りはないが、塔・講堂建立時には存在したとみられる。位置・規模からみて、南北塀 SA 500、及び東西塀 SA 570 は、寺域内の区画施設の可能性が強いと考えられる。溝 SD 530 は、上幅3.5m、深さ30~40cm。溝 SD 530 の東肩部で柱穴 SX 571 を検出した。径37cmのケヤキの柱根が残る。II期の遺構には柱穴 SX 576、暗渠 SX 573・574、石組溝 SD 531 がある。暗渠 SX 573 は底と側に塼を用い、埋土から奈良時代末の瓦が出土した。暗渠 SX 574 は、暗渠 SX 573 を改作した暗渠で、東側は暗渠 SX 573 の塼をそのまま使い、西側を石組とする。埋土から平城宮III期に属する杯が出土した。暗渠の上部には土塀状の構築物の存在を推定することができる。石組溝 SD 531 は、上幅が65cm、深さが40~60cmである。埋土からは多量の瓦、そして土馬・土師器・須恵器・黒色土器が出土した。土器では11世紀前半頃までの遺物が含まれる。

III期には暗渠 SX 573・574 を壊して土塀 SK 575 が掘られた。土塀 SK 575 の埋土から10世紀から12世紀前半にわたる土器が多く出土した。



寺域東北部調査遺構図

以上のように、今回の調査において、東回廊の扉位置を確認し、その構造を復原できる資料を得るとともに、寺域東北部の実態を解明する手懸りを得た。山田寺の全体像を理解するためには南門、あるいは僧房、食堂などの諸施設を明らかにすることが今後の重要な課題である。(木下正史・深澤芳樹)